はしがき

「身体が何をなし得るか、まだ誰も規定していない」――いまだ心理学者でさえなかった若きヴィゴツキーが、スピノザのこの宣告を処女作『芸術心理学』のエピグラフに掲げたのは 1925 年のことである。彼は書いている。「芸術が実現することのすべてを、芸術はわれわれの身体において、またわれわれの身体を通して実現している」。

20 世紀の人文知は、ヴィゴツキーのこの確信を徐々に共有していくプロセスであったと言ってよいかもしれない。今日、いたるところで身体は私たちの思考を刺激しており、いたるところで思考は身体という他者に遭遇している。ロシア文化研究も例外ではない。スラブ研究センターは 1999 年に開催されたシンポジウムですでに「身体」をとりあげているし、[1] ロシアでも 2005 年には『ロシア文化における身体』という大部の論集が刊行された。[2] そういう意味では、「身体」はとくに目新しい主題ではない。

だが、このように「身体」という語を口にしながら、私たちはいったいなにを欲望していたのだろうか。演劇における肉体の復権、文学における性のタブーからの解放、哲学における心身二元論の克服といった主題が語られるとき、「身体」はいつも「言葉」や「物語」に対置されてきた。「身体」は「文化」の外部にあるもの、「表象不可能なもの」、要するに「自然」として位置づけられ、顕揚される。しかし「身体」が「表象」の外部に位置づけられるとき、「表象」の内部にいるはずの私たちの位置はあっさりと忘れ去られてしまう。「身体」はわたしたちが文化についていだく不満の投影になってしまうのだ。そのとき「身体」という語は、私たちの思考を停止させる一種の罠となる。身体のロマンティシズムを警戒すること、それが、「身体」という問題を再考するための第一の条件であるように思われる。

野生の身体を夢みるのではなく、文化のなかで身体が断片化され、媒介され、再構成されるさまを記述すること。表象の外部に身体を位置づけるのではなく、表象の機制の不可分な構成要素として身体を分析すること。現代ロシアにおけるもっとも先鋭的な文化理論家の一人ミハイル・ヤンポリスキーの大著『デーモンと迷宮――ダイアグラム・デフォルメ・ミメーシス』の邦訳刊行（乗松亨平・平松潤奈訳、水声社、2005 年）は、このような試みの出発点としてまことにふさわしいものであるように思う。ヤンポリスキーのいう「身体」とは、身体と記号、身体とメディア、身体と歴史が接触する表面において生み出され、歪曲されて、私たちの生の条件をつくりだす出来事である。ヤンポリスキーは哲学、文学、映画、美術、舞踏といった領域を自由に横断しながら、身体を

---

[1] 北海道大学スラブ研究センター冬期シンポジウム（1999 年 1 月 28-29 日）におけるセッション「20 世紀ロシア文学と身体」の記録が、『旧ソ連・東欧諸国の 20 世紀文化を考える』（スラブ研究センター研究報告シリーズ No. 64）に掲載されている。

[2] *Кабакова Г. И. и Конт Ф.* (сост.) Тело в русской культуре. М., 2005.

複数の力の作用として捉えるドゥルーズとガタリ、身体を包囲する知＝権力を追うフーコー、さらには身体とメディアの無節操な接合の歴史を記述するマクルーハンやキットラーらとも共鳴しつつ、身体の諸相をあくまで「文化の反映」として分析しようとしている。彼にとって「身体」とは、文化テクストのなかに表象される想像上の身体と、表象する現実の身体とをともに巻き込む、ひとつの文化的装置なのである。

本論文集は、おおむねこのような問題意識を出発点として、2006 年 3 月 9－10 日に新潟大学でおこなわれた公開研究会「テクストと身体」での発表と討議をもとに執筆されたものである（新潟大学人文学部研究プロジェクト「文化史・文化理論の再検討」主催、北海道大学スラブ研究センターの 21 世紀 COE プログラム『スラブ・ユーラシア学の構築』共催で、新潟大学プロジェクト研究推進経費の援助を得た）。[3] カラムジンの奇妙な告白から現代日本演劇におけるチェーホフの変容にいたるまで、以下に読まれる諸論文の問題意識は多様であり、主題も多岐にわたっている。ヤンポリスキーが新たに設立された表象文化論学会の第一回大会（2006 年 7 月 1 日－2 日、東京大学駒場キャンパス）に招かれて基調講演をおこない、乗松亨平氏の論考がヤンポリスキーがコメンテーターをつとめるパネルで口頭発表されたことが示唆するように、問題はすでに狭義のロシア文化研究の枠をこえている。これから考えねばならない問題はあまりにも多い。本論集の刊行が新たな論議のきっかけとなれば幸いである。

番場　俊（編集担当）

[3] 研究会の模様は乗松亨平氏が紹介している。「テクスト、あるいは身体――公開研究会「テクストと身体」についてのメモ」、『水声通信』No. 9、2006 年 7 月号、36-40 頁。